

「はっ、はっ、はっ、……くうっ！」

辺り一面に広がる野花、生い茂る緑。一見のどかな風景に似つかわしくない、戦闘のみに特化し肥大化した左腕をぶら下げたデジモンが息を荒げて奔る。引き締まった、それでいてたっぷり脂の乗った豊満な肉体を持ちながら、男勝りで荒々しい気性のデジモン、メルヴァモン。以前から平和なハニーランドを侵略し、生殺しの状態で力を搾取する下劣なデスジェネラル・ザミエールモンから仲間を守るため、敵が奪った力でこれ以上拡大する前に叩こうと単身、敵本拠地に挑んだのだが……いかに屈強な龍型デジモンといえど、あまりに無謀な策は失敗に終わる。待ち構えていたハニービーモン達の包囲からはなんとか逃れたものの、罨により左腕に負傷を追い、無様に敗走する結果となった。地の利がある森林迷路の中を、傷付きながらも素早く駆け抜けていく。視界を埋める程いた牡蜂達のけたたましい羽音も、段々と遠くなり、暫くして完全に気配が消える。

(……撒いた、か……?)

息を殺し、樹に背を預ける。耳を澄ませ、ざわめく木々の音の中に、羽音が混じっていないのを確かめ、再び奔り出そうとしたその時。

『ブスッ!』

「っ!しまっ……!」

森林内に配備されていたハニービーモンの伏兵が、特殊な毒針でメルヴァモンの剥き出しな美脚を突き刺す。

運悪く、龍姫のもたれた樹にはあらかじめ伏兵が潜んでいた。伏兵虫は、音をたてないよう静かに這い、隙を突いて枝から跳ね落ち、そのままの勢いで機動力——脚部に目がけて淫針を捻じ込んだ。

決して小さくないダメージが残る体で追手を掃うのに精いっぱいだったメルヴァモンは流石に気付く事が出来ず、刺されたと分かった時には脚の力が奪われて跪く。

奇襲が成功したのを確認した他の伏兵達が、今度は存分に飛び回って龍姫に襲いかかる。

(ま、まだこんなにっ……?!)

完全に敵の戦力を見限り、想像以上の数に驚愕で一瞬動きが止まるが、湧き上がる闘志ですぐさま巨剣を握り締めて振り返りざま薙ぎ払う。

「例え脚が動かずとも、貴様ら如き遅れを取る私ではない!」

左手と下半身が使えない状態で、それでも巨大な剣を軽々振り回す。刃と柄を利用し善戦するものの、やはり数が違い過ぎる。

八方から同時に襲われては剣が追い付かず、右腕、背中、脇腹、首……背面から容赦なく毒針を打ち込まれる。

『ブスッ!ブスブスッ!』

「んっっ……あああう!」

深く刺さり、それでいて柔らかくうねる針が一瞬で何度も蠢き、『ドクン、ドクン』と脈動する。

突き刺さった点から伝わる衝撃と、不思議な感覚に思わず高い声が出る。基本的に一体につき一針で十分な毒が一度に何カ所も刺されたのだ。通常の何倍もの刺激が奇妙な熱となって体内を走り、力が抜け落ちる。

ガラン、と大剣を落とし、その場にへたりこむ。

「くう……っ!」

自分の何倍も小さい羽蟲に数を以てしてやられた屈辱に、歯を食いしばって唸る。

自分の力が敵に渡る……圧倒的な不利に、それでも闘志だけは死なず、いつか復讐を……と考えていた時、不審な点に気付く。

ハニービーモン達が撤退しないのだ。いつもなら生かさず殺さず、適度に力を奪った後、すぐさま撒収していくはずなのに、未だにこの場に残り、纏わりつくようにゆっくり近づいてくる。

まさかトドメを刺すつもりだろうか。だが強欲で意地汚いザミエールモンがそんな指示を出すとは思えない。自分の様なデジモンは、むしろ徹底的に搾り取り、利用し尽くすはず。恐怖と力で支配されているハニービーモン達が命令を無視するとも思えない。なら……?

それに、先程から何やら身体がおかしい。確かに戦闘で体温が上がったが、それとは何か別な、込み上げてくる熱を感じる。

今まで針を受けた事がないからか、副作用的なものかと思っていたが、被害に遭ったデジモン達の話とも少し違う……

思考を巡らせていたその時、ツン、と乳峰に触れる何かを認識してハッとすると。

ゆっくり近づいたハニービーが、器用にも薄い装甲の上から——いつの間にか張りつめた突起——目がけ、針の照準を定めており、今まさに突き挿さんとしている。

「まっ、まさか……!」

全てを察した龍姫が、体を振じて針撃を回避しようとするも、力が抜けて上手く体が振れない。それに何故か硬くなっている先端に引っかけるように針先を僅かに喰い込まれ、多少揺れた程度では相手もそれに応じて素早く対処できてしまう。

おまけに両手両足を他の牡蜂達が押さえ付け、動ける範囲もほんの僅か。

数瞬の抵抗空しく、遂にハニービーモンが尾に力を込め、前に突出す。

「や、やめ——」

最後の足掻きに口で抗うが、言い終わる前に**牡槍が突き挿さる。**

特殊な毒針は**なぜか装甲を穴も開けずすり抜け**、半勃起した乳首に到達する。

一瞬で更に奥まで突き入れ、**柔乳の感触に満足すると、針先から分泌液を注ぎ込む。ピクピクと素早く脈動し、支配欲のまま思い切り出し切る。**

既に毒により興奮状態にあるメルヴァモンの胸は**すぐさま甘い熱に侵され、その凄まじく鋭い感覚に視界が弾け、仰け反って絶叫する。**

『ズブンッ!』

「んッッ……あああああああああ!!」

毒を撃ち込んでなお、余韻に浸っているのか針を小さく前後させる牡蜂。

余程の衝撃なのか、乳首を侵された牝龍は仰け反ったまま、ビクビク痙攣して喘いでいる。

「あっ……あああ……あはああああ……」

生まれて初めて味わう甘ったるい媚熟に、堪えきれず牝龍の声をあげてしまう。恥ずかしさと情けなさで顔を上気させた頃、ようやく淫針がぬかれる。

「んっ……ッ!」

『ズボッ!』と音がするかのようによき勢いで抜き出され、最後の刺激にまたしても上擦った音が出る。

思いがけない仕打ちに息を荒げながら、間違えようがない謎の結論を導き出す。

（こ、こいつら……私を弄ぶ気か……!）

身体が浮く様などこか心地よい感情が芽生えながら、敵の戦士として恥ずべき行為に怒りを燃やして吼える。

「貴様ら、よってたかって女を騙るなど、それでも戦士……ッ!」

睨みつけ、歯を剥いて説教しかかった所に、交代した蜂が再び双乳の先に構える。

「なッもうやめ……ッ!」

一番手二体が首尾よく満たされたのを見て興奮したのか、素早く二番手の二体が欲針を押し出す。抵抗する間もなく、またしてもあっさり挿しこまれる。

『ズブ……ッ!』

「ああああああああああ……!!」

同じく、認めたくはないものの強い興奮状態にある恥房に牡槍を入れられ、再び仰け反って嬌声を晒す。

反り返りが更に肉房を差し出す形となってしまう、望まぬ欲望を自ら選んだような倒錯状態に陥り、思考が停止する。

だらしなく開いた口からは透き通る筋が淫靡に垂れ下がり、目尻には悔しさか、それとも歓喜か——感情の高鳴りでうっすら雫が出来かける。

先と同様、欲棒を挿り込んだ牡二匹は小さく前後し、豊乳をたぶたぶと震わせる。

「んっ!……ッ……ッ!……んんんッ!」

媚毒が回り、すっかり熱を帯びた胸を蹂躪されながら、せめて声だけは出すまいと必死に歯を食いしばって耐える。

女が嫌がる様を見せつけては逆に敵の嗜虐意識を煽るだろうというせめてもの抵抗だった……が、明らかに欲情しきった身体で……しかも無意識に腰を前後させながら……**堪える表情がどれだけ牝龍の本能を刺激するかは分かっていたようだ。**

尖った肉を犯す牝龍の動きが急に激しくなり、淫乳全体を扱き上げるかのように打ち付ける。

大きく揺れる肉がぶつかり、『ずぶん、ずぶん!』と卑猥な音を立てる。

「んっああああっ!やめっ!やめ……ッ! ああああああ!♥」

強いピストンに堪えられなくなり、いとも容易く喘いでしまう牝龍。

悦びの涙を流し、舌を突出し、弱った肉体で必死に悶え狂う。

上下左右、ただ突かれるだけで勢いよく揺れる巨乳。

やはり相当に卑しいのだろう。見ているだけでも楽しいのか、牝龍達はギンギンに血走った眼でまじまじと凝視している。

そして自分も、肉が揺れ、潰され、圧迫される感触に、**理性で拒絶しても否定しきれない愉悅**にたまらなくなる。

普段は邪魔で仕方がない脂肪の塊に、こんな愉しみがあつたのか……と犯されながらも頭のどこかで感動すると同時に、こんなものさえなければ……と自分の発育の良さを怨む。

それでも**下卑た凌辱になど屈するわけにはいかず**、残った理性と怒りで形だけでも抗おうと、食いしばろうとする口から喘ぎを漏らしながら、凄まじい形相で睨みつける。

「ふうっ!ふううんっ!んあッ!あああああ……!!」

実はとてつもなく厭らしい顔を作っている事に気付かず、なお火の視線で牡蜂を射る。

そうこうしている内にさすがに長い凌辱に満足したのか、**ぶるぶると**震えた後、ハニービーは勢いよく針を抜き出す。

中の淫毒で『ごぼっ』と音がしそうな気さえするほど犯された柔乳。

与えた快樂の手応えに、したり顔で見下す牡蜂だが、龍姫もまた闘志を取り戻して逆に睨み返す。

肉欲に悶え息を乱しながら、自らの矜持のために力の限り言葉を放つ。

「私はお前達の姦計になど……んっ……屈さないッ!」

龍の強い決意に、ならば徹底的に打ちのめさんと、怒りを露わにするハニービー達。

三番手がトロトロの乳端を犯そうと近づくその時。

「いや〜強気も強気、結構結構」

ばん、ばん、と呑気に拍手しながら、声の主が接近する。

いつの間に居たのだろう。情けない事に、乳姦に気を取られて、更にその小さい体軀では、気付くはずも無かった。

ハニーゾーンのデスクジェネラル、ザミエールモンが見上げてか見下してか、とにかく蔑んだ目で視姦してくる。

蜂達も将の意を汲んでか、欲を押さえてすごすごとメルヴァモンから離れ、将への道を作るように並ぶ。

「貴様……ッ!」

「おーおー、そんな怖い顔すんなよ、大事なお客さんの前だぞ」

宿敵を前にして威嚇するが、掌サイズの將軍は軽いなして話を進める。

「ほーら、感動の再会だぞ〜」

ニヤニヤ笑いながら、『客』に手招きする。

木陰から静かに現れたのは……やはりメルヴァモンの弟、イグニートモンだった。

「イグニートモン……！」

弟の姿を見て、敵にも関わらず思わず名前を呼ぶ。が、発する気の変りように、口をつぐんでしまう。

鋭利な眼光で姉を見る彼に、以前の様な平和を望むが故の臆病さや、正義を好む故の躊躇など感じられなかった。

良く言えば潔い…悪く言えば随ち切った、強い悪意で姉に冷たい目を送る。

「んー、いいねいいね。じゃあ早速初めてもらおうかな、姉弟での決闘をよォ！」「っとその前にい」

すっかり自分一人のペースに酔い、べらべらまくしたてるおしゃべり將軍。

「まあオレらも鬼じゃねえ。武器を使うのはやめようかあ。そして！相手を気絶させた方の勝ち……って事でえ！」

勝手にルールを作り、一人で盛り上がる。が、力の抜けた今、武器を上手く扱うのはほとんど無理だろう。また、愛する弟を殺さなくて済むというのも…元より命まで奪うつもりはないが…有難い条件だ。不気味な程にメルヴァモンに有利だが、やはり何か裏があるのか、それとも蜂毒に侵された身体に負ける見込みなどないのか…。

「お前が勝ったら弟は返してやるよ。俺もこのゾーンから出て行こう」

「……………本当だな…？」

絶え間ない欲刺激が途切れた事と、何より本物の戦闘を前に、弛緩しきった肉体を何とか立て直す。

「あー、約束しよう。その代わり、お前が負けたらウチの城の奴隷にさせてもらおうぜ」

立ちあがるまでの時間稼ぎついでに、形式上の公約を交わす。

（こいつ……部下を使い散々弱らせたところ狙い……なんと下劣な！）

状況から考えれば分かる事ではあるが、敵の掌で踊らされている事に、めらめらと敵意を燃やす。

（どうせ約束は守らないだろうが……何としても勝つ……勝って、とにかくトグニートモンと逃げのびるんだ…！）

ザミエールモンの姦計により、弟イグニートモンと決闘させられるメルヴァモン。

武器無し、気絶させた方の勝ち。メルヴァモンが勝てばイグニートは返され、ザミエールモンもこのゾーンを去る。

逆にイグニートが勝てば、メルヴァモンはザミエールモンの城で奴隷生活が待っている。……というルールで、姉弟対決が始まった。

ザミエールモンのやる気の無い合図と同時に、低い姿勢で一気に接近するイグニート。フラついた身体では当然対処しきる事はできず——もともと、普段の状態でも上手く捌けるか、とさえ思える以前とは別格の動きに——

「ぐっ！」

高速の右回し蹴りに何とか反応し、重い左腕でブロックする。

だが重く鋭い打撃は、ガードの上からでも十分過ぎる威力を与え、大人と子どもほどのサイズ差にも関わらず姉の体を浮かせる。

「がっ……！」

吹き飛ばされた先の細木に叩きつけられ、苦痛に美貌が歪む。

しかしその痛みで、今まで身を蝕んだ快楽の鎖がほどけたように、少しずつだが力を取り戻す。もちろん、あれだけ強い快楽を忘れさせるほどの痛み……

打撃を繰出す相手に、いつまでも受けに回る訳にはいかない。

休むことなく無言で駆けるイグニート。再び急接近し、左肩を引いた瞬間。

メルヴァモンの右手が素早く手刀を繰出す。動きを呼んだ一手にも子龍の眼は捉え、きっちり反応して右腕で防ぐ。

（ここだッ！）

その超速ゆえの反応を利用した、ガードが下がった頭部への左。

決まった——と思った瞬間、イグニートの動きが更に加速する。一瞬で急旋回し、左ローキックでメルヴァモンの左膝を崩す。

同時に伸びた左腕を捉え…背負い投げの要領で、姉を投げ飛ばす。

天地が逆さになり、再び吹き飛び気に激突する。背中に鈍い感覚が奔り、流石に疲労困憊か、樹にもたれるように倒れ込む。

「うっ……あ……」

自分が弱っている以上に、イグニートが強くなっている。太刀打ちできない、圧倒的な差。

「そろそろ行こうかあ〜？」

将が合図を送り、ゆっくり手が届く距離まで歩いた子龍が姉の肩を掴み上げ、樹にトン、と押し付ける。

流石に座り込んだ状態では高さが逆転し、珍しく弟が見下す形になる。

体が動かず、これまでか……と覚悟を決めた時。

『がっし』と音が聞こえてきそうなほど、力強く両胸を持ち上げられる。

「なァッ……！？」

余りに予想を越えた弟の行動に、素っ頓狂な声が出る。

更に『ぎゅううっ』と手に余る淫肉を押し潰され、埋め込まれた淫欲が目覚め出す。

「あああああつ！な、何を…」

弟に性感帯を罅られ、快楽がぶり返し、混乱で訳がわからなくなる。

「おい、見せてやれ」

将軍が実に愉快そうにニタニタ笑いながら指示を出す。すると、持ち上げていた両手を急に離される。

「んっ、あっ……！」

じわじわと熱が籠り、どんどん発情していく双乳。支えがなくなり**ぶるん**と揺れただけで、甘い声が漏れてしまう。

と胸への刺激に悶えた次の瞬間、イグニートモンが一気に下半身の装甲を脱ぎ下ろす。

「……………な……………」

そこには今まで見た事もない、巨大な陰茎がそそり立っていた。自分より一回りも二回りも小さい体からは到底考えられない大きさで、しかもへソに当たりそうなほど天を向いて、グロテスクにビクビク痙攣する。

「いやな、部分的に強制デジクロスしてやったんだよ？そしたらよお…」

やはり、強引な改造によるものだった。よく見れば、先程まで無表情に見えた弟も、よく見ると辛そうに、静かに息を荒げている。

(デジモンには本来必要としない部位を、ここまで醜く肥大させるなど……ザミエールモンめ、な……………なんて、事を……………)

弟への余りに残酷な仕打ちに、敵将に対する深い怒りが再発する……が、なぜか黒光りする弟の肉槍から目が離せず、まじまじと見つめてしまう。

「言っとくけどそいつが望んだんだぞー。じゃ、後は好きになしな」

一瞬、到底理解できない言葉を聞かされ、問おうとした時には再び重肉が持ち上げられる。

「はぁん！」

急に強い愉悦を刺され、似合わない可愛い声で啼いてしまう。が、このあまりに倒錯しきった状況をなんとかしようと、弟を説得する。

「お……落ちて着くんだ、イグニートモン……………こんな、偽物の感情に、負けては……………」

まるで自分に言い聞かせるように、イグニートモンが被害者だという事を前提にしどろもどろ言葉を紡ぐ。

が、まるで聞いていないのか、息を更に荒げて掴む手により力を加えて押し付ける様に持ち上げる。

「あああああっ！」

強い刺激に目が開けられなくなり、視界を閉じて嬌声を出してしまう。

「…姉ちゃんが悪いんだ……………」

興奮したまま、イグニートモンが今日初めて口を割る。

「いっつもいっつも……………無駄にエロっつい格好しやがって……………」

まるで恨み節を叩き付けるかのような口調と、まだ意味が理解できない……………したくない言葉に、「なっ」、と驚く姉龍。

「いやらしい体見せ付けて……………おっぱいもぶるんぶるん揺らしやがるし……………」

柔肉を弄ぶ手に更に力がこもる。

「こうされたかったんだろ？あ？！」

『ぎゅうううう！』

「あはああああ！やめろおおおお!!」

一際強い圧迫に、**ビクンッ!**と顎を反らしてしまう。

どうしても、信じたくなかった。

確かに今まで、発育の良い身体を好奇の目、侮蔑の目で見られる事はあった。種族故の、変えようがない装備の露出度の高さに抵抗感もあった。

だがそれに耐え、女を捨ててまで強さを手に入れられたのは、弟だけは純粹に戦士として応援してくれるから……………そう思っていた。

それなのに、まさか自分の外見がここまで弟を追い詰めていたなど……………弟がそんな不純な男だとも、自分がそこまで嫌らしい身体だなどとも、思いたくなかった。

それなのに……………

「うわ、やっぱりおっぱい弄られて気持ち良いんだ。何が誇り高き戦士だよ！この変態！」

「うああんっ、やめ、んんんう~~~~~！」

ぐにぐにと指を食い込ませ、柔肉の形を変えて遊ばれる。

しかも最愛の弟に変態呼ばわりされ、精神が追いつめられる……………はずなのに、何故か熱い感覚が胎から込み上げて来る。

「ち、違う、これは、毒でえっ……！」

へろへろになった顔で、懸命に弁解しようとするが。

「毒ならむしろこんな風にはならないだろ……………下手な言い訳すんなよ、このっ！」

まるで説得力の無い言い訳に苛立ちを覚えたのか、一瞬で胸を覆う装甲を摺り下げられる。

力任せに動かした事で、反動に両胸がこれ見よがしに上下に跳ねる。

「あああああっ！イヤああっ！」

胸のバウンドの刺激もあったが、それ以上に恥ずかしさで悲鳴を上げる。

今まで他人に見せた事がない胸を全て曝け出し、龍姫の混乱は頂点を極める。

主役はイグニート、と分かっているながら、遠慮がちにザミエールモンもハニービーモンも丸見えのはしたない柔肉を視姦する。

「や、やめろおっ！見るなあっ！」

必死になって叫ぶが、すぐさま勃起乳首を弟に掴み上げられ、恥ずかしさがそのまま気持ち良さに変わる。

「んあはあああ！やめ、やめろ、イグニートお……………」

名を呼んで叱り付けるが、いつもの毅然とした風格などまるでなく、甘ったるい声になってしまう。

「こんなにピンピンにしてさあ……気持ち良いんだろ？おらっ、もっと勃たせてやるっ！」

半端に堪えて勃起しきっていないのが逆に加虐心を煽ったか、乳首をグッと掴んで扱き上げる。

「ほらっ、ほらっ！本性出せオラッ！」

「あ、あ、ああつ、あああああああああ~~~~！」

荒々しく、それでいて幼さの残る手が優しく包み、あつと言う間に快楽の淵に追い込まれる。

「そらああつ！」

最後に『ぎゅううう!!』と一扱きし、半勃起乳首を本気勃ちに仕上げる。

「あはあああああ……ツツツ!!!」

快楽に蕩け切った呆けた顔で、だらしなく舌を突出し、唾液と涙を噴き出しながら痙攣して啼く。

余韻に浸る間もなく、更に掴んだ完勃起乳首を顔まで引っ張り上げ、欲情部分を見せつける。

「ほら見ろっ！これっ……これが姉ちゃんの……気持ち善がってる証拠だろっ……！」

「あつ、い、痛い……やめろっ！見せるなあああ……！」

無理矢理に引き上げられ、強い痛みを瞬時に感じ、更に勃起乳首をまざまざと見せられて恥辱に顔が赤くなるが、それもこれもすぐに快感に変貌して体が熱くなる。

抵抗するそぶりはしても、為す術なく牝の反応をする姉を見て更に興奮したのか、息つく間もなく乳首に吸い付く。

『ぢゅううっ！ずちゅうううううっ！』

「はおおんっ！それっ！それダメえええええええ!!!」

限界まで感度が高くなった乳首を思い切り吸い込まれ、あられもなく啼き叫ぶ。

膣孔からも愛液が溢れ、腰がクンッ！と浮いてしまう。

「んっ………ぶはあつ！」

自ら弱点だと宣言してくれた責めを、もう片方の肉突起にもお見舞いする。

まるで母乳を求める赤子の様に、顔もうずめ『がっし』と掴んで力一杯吸い尽くす。

「つつおおおうツツ！やめ、やめっ！ああああああああ!!!」

首も、胸も、腰も、快楽に堪え切れず『ガクンツガクンツ』と前後上下に振りたくる。

胸以外の切なさも挟ってやろうと、イグニートは片手を胸から腰に回す。

たっぷりと重厚感のある、自分よりずっと大きい、余りある淫肉肢体。

それに埋まるようにしがみ付き、屹立したペニスをスパッツ越しに擦り付ける。

腰に回した手が下に伸び、尻肉やその谷間に指を食い込ませ、グッと持ち上げるように引き寄せる。

「おおおおおお!!も、もうやめ、これ以上、やめえっ!!」

余りの快楽に呂律が回らず、肉体は理性とは裏腹に密着した弟の指、肌、肉に反応して吸い付くように求めて離れない。

更に体格差のせいで自分が幼い弟を抱きかかえて犯している様な錯覚さえし始め、背徳の極みに頭が真っ白になる。

「………つつ………あああ！」

一しきりして、勃起乳首を文字通り堪能し、イグニートがようやく口を離す。

「あはあああああ！」

離れ際、肉端にかすめる唇がたまたま、一際高くメルヴァモンが嘶く。

二匹とも、限界まで発奮して肩を動かしてゼエゼエと息を切らす。

雄龍は獲物を狩る様な鋭く血走った眼で、雌龍は快楽に蕩けほとんど閉じそうなほど細くした眼で、ねっとり互いを見つめ合う。

しばらくして、イグニートが震える指で秘部を護るスパッツにゆっくりと触れる。

「あつ……！」

柔らかく熱い感触にメルヴァモンが戦慄くが、その間にもイグニートは指で器用にぐしょぐしょに湿りきったスパッツを破り、見事に陰部のみを晒した変態スパッツが完成する。

更に息を速め、人差し指と中指とそろ……つと慎重に挿れる。

「やめ……ダメ……」

息も絶え絶え、力なく拒絶するが、お構いなしに二本指が突き挿さる。

既に愛液でぐちゃぐちゃになった秘具はすんなり弟の指を受け入れ、抵抗どころか呑み込んでいき、啜え込んで離さない！

「あ——………ツ！」

全身がぶるぶる震えた瞬間、イグニートが指を引っこ抜く。

とうとう我慢できなくなったのか、姉の太脚を掴み、尻肉を地に付けたままM字に大きく開脚させる。

全く萎えない剛直を掴み、標準を合わせる。

「やっ……やめろ……それは、……それだけはダメだ……」

最後の一線を越えまいと、肉悦に震える舌で言うが、発情しきって欲棒を求めている事は自分でも痛いほどわかり、もはや白々しささえある。

『くちゅっ……』と濡れた音が響く。

「や、やめ……私達は、私とお前はっ、……っ」

——…姉と弟なんだぞおっ……！

禁忌を犯す事への警告がトドメとなり、後押しされた性欲が極太欲棒を一気に叩き付ける。

使う事はないと思っていた膣肉が焼ける程の熱を食らい、燃える様に火照る。
純潔の証が一瞬で突き破られ、その痛みすら何倍もの肉悦に変わっていく。
狭い壺は乱暴に押し広げられ、それでいてびっちり張り付いて扱き上げる。
Gスポットも、子宮口も、自分も知らない弱点も、全てが貪られて抉り返される。
許容量を越えて本能に教え込まされ、一瞬で頂点まで昇り詰める。

『ズッポオオオオ!!!』

「あ——ツッ!!!あああああああああああああああつつつつツッ!!!」

体験版はここまでです。続きは製品版で！